

若頭、上納金の利息に本部長のモノを
啗えさせられ、納期のたびに中出しで
払わされる

2026

•

10

•

12

目次

第1話 道場の検分

第2話 口移しの盃

第1話 道場の検分

「かんぬきを掛けろ、若頭。今夜は誰も入れん」

飛龍連合関東本部の付属道場には、灯がひとつしか点いていなかった。

板の間の真ん中に座卓が出され、その向こうで仙波慶臣が胡座をかいている。

紺の着物の肩が、座卓の幅をはみ出していた。

白髪まじりの短髪、四十六の関東本部長。

帳簿の上に置いた手のひらは、開いた頁をまるごと隠すほど重い。

小針峻介は戸のかんぬきを落とし、雪駄を揃え、板の間に膝をついて頭を下げた。

片桐会の若頭、三十三。

背丈は本部長とほとんど変わらない。

肩と胸の厚みも、着物の上からなら負けていない。

負けているのは、座る場所だけだった。

門のところでは、本部の門番の久住が、電話で植木屋と揉めていた。

「松を三本刈っただけで、あの値はねえだろう」と、峻介が脇を抜けるあいだも、久住は受話器を耳から離さなかった。

道場の中までは、その声も届かない。

「本部長。帳場のことを、申し上げさせてください」

「帳場のことなら、ここに載っている」

慶臣の太い指が、帳簿の一行を叩いた。

片桐会の欄にだけ、赤い線が三月続けて引かれている。

本体の欠けに利息がのって、その行だけが毎月太っていく。

「組長が倒れてから、下請けの入金が詰まっています。来月には筋が戻ります」

「先月の帳にも、同じ文句が書いてあった」

慶臣は行の横に貼られた付箋を剥がし、座卓の上で丸めた。

本部が前に認めた分割の約束が、それで紙屑になった。

「本部長、片桐会はまだ飛龍の傘の下で——」

「傘の外に出たら、どうなる」

峻介は口を閉じた。

破門になれば、片桐会は飛龍の名前を失う。

下請けの仕事も、通いの筋も、同じ日に干上がる。

事務所の机で給料袋を待っている十二人の顔が、目の奥に並んだ。

「今日は紙にしない。執行もしない」

慶臣は帳簿を閉じた。

「だが、口では言っておく。来月も空いたら、片桐会の名前はこの帳から落ちる」

「……承りました」

「本部への言い訳は、聞くだけ聞いた。今度は私の番だ」

慶臣は帳簿の脇から、湯呑みを引き寄せた。

冷めた茶を一口含み、喉を鳴らして飲む。

「片桐会の名前は、私が本家に通した。十年前だ。あの頃の片桐の親父は、上納を月の頭に持ってきた」

「存じています。俺は、その鞆持ちでした」

「鞆の中身を見たことはあるか」

峻介は、鞆の持ち手が掌に食い込んだ重さを思い出した。

「封筒の厚みだけは、毎月、手で覚えていました」

「その厚みが、三月前から薄くなった。いまは封筒が来ない」

峻介は膝の上で拳を握った。

指の付け根の骨が、拳の形のまま白く浮く。

「若頭が組長の代わりに帳場を回しているのは、私も聞いている。病院通いもな」

「でしたら」

「聞いているから、今日は帳場の話で終わらせない。帳場の話なら、電話で足りる」

慶臣は湯呑みを置いた。

底に残った茶が、ことりと鳴った。

「……では、何をなさるおつもりで」

「若頭の体を、帳簿と同じに検める。裸だ」

峻介は唾を飲み込んだ。

座卓の上の帳簿の、赤い線のところだけが灯を跳ね返している。

「本部の道場で、ですか」

「場所は、呼んだ者が決める。帯だ」

峻介は立ち上がり、羽織の紐を解いた。

羽織を畳んで座卓の端に置く。

帯の結び目に指をかけたとき、袂から紙が一枚すべり落ちた。

慶臣の手のほうが早かった。

「病院の領収書か。日付は今日だな」

「……組長の、入院の分です」

「現金で揃えて、窓口に出したわけだ」

慶臣は紙を灯にかざし、それから峻介の袂へ差し戻した。

「親父の薬代は耳を揃える。本部の行は空けておく。どういう順番だ、それは」

——順番もくそもあるか。

——病院は、払わなきゃ親父が廊下に出されるんだよ。

口には出さず、峻介は帯をほどいた。

長い帯が板の間でとぐろを巻き、着物の前が割れる。

「本部の金を、後回しにしたつもりはありません」

慶臣は座卓に肘をつき、顎に乗せた。

峻介は長着を肩から落とした。

襦袢の白が、灯の下で汗に透けている。

慶臣の目は、峻介の顔から一度も下りない。

肘をついたまま、脱がされている男の顔だけを眺めている。

峻介は目を逸らしかけ、座卓の木目に視線を逃がした。

「こっちだ」

顎を乗せたまま、慶臣が言う。

峻介は目を戻した。

襦袢の紐を解き、袖を抜いた。

厚い胸板と、その下の割れた腹が、板の間の冷氣にさらされる。

両の拳骨は、指の付け根の骨が盛り上がったまま、腿の脇で固まっていた。

体には、白い襦と白足袋が残った。

「襦もだ。足袋は、そのままでもいい」

峻介の指が、腰の結び目をつまんだまま動かない。

「……せめて、灯を落としていただけませんか」

「暗くしたら、お前の顔が見えん。若い衆は全員、外へ出した」

峻介は結び目を引いた。

布が腿を擦って落ちる。

前袋に押し込められていたちんぽと金玉が、重さのまま股の間に垂れた。

冷えた空気が、毛の奥まで入ってくる。

慶臣は肘をついたまま、峻介の足首から順に目を上げていった。

足袋の白。

脛の毛。

太い腿。

股ぐらで縮こまっているちんぽ。

そこで目が留まり、慶臣は鼻で笑った。

「図体のわりに、ちんぽは遠慮がちだな」

峻介の両手が、前へ寄りかけた。

「手は腿の横だ」

「……本部長の前で、隠すほどの物じゃありません」

「なら胸を張れ。猫背で、ちんぽだけ縮めて立つな」

峻介は肩を引いた。

胸が張り出すと、その下の物がかえって目立つ。

慶臣は座卓を回り、峻介の前に立った。

同じ高さの目が、ほんのひと息のあいだ正面からぶつかる。

それから慶臣は、峻介の肩を掴んで後ろを向かせた。

「手は頭の後ろ。足は肩の幅」

峻介は指を組み、後頭部に当てた。

背中を、灯が舐める。

肩から肩甲骨にかけて、龍が一匹、筋彫りのまま止まっていた。

鱗は線だけで、墨の色が入っていない。

尾と雲は、まだ下絵すら入っていない素肌だった。

慶臣の指が、龍の首の線に乗った。

爪の先で、墨の輪郭をなぞっていく。

峻介の肩の筋が、指の通ったところから順に跳ねた。

「誰が途中で放り出した、この龍は」

「……背中まで、帳簿に載せる気ですか」

「金が続かなかった、と言え。こういう背中は見飽きている」
指が、墨の切れたところから素肌へ下りた。

尾が入るはずだった白い肌を、背骨に沿って撫で下ろす。

腰のくぼみ。

尻の割れ目の、上の端。

そこで指が離れ、代わりに手のひらが尻たぶを掴んだ。

重い手だった。

指の跡が残るほど揉まれ、尻の肉が左右に割られる。

「ッ……本部長」

「でかい尻だ。龍より、こっちのほうが先に仕上がっている」

慶臣が手を離すと、肉が戻ってぶるりと揺れた。

「前を向け。仁義を切れ。裸のままでもいい」

峻介は振り返った。

慶臣は腕を組み、足袋の足を半歩開いて立っている。

着物の前が、帯の下でわずかに張っていた。

——この野郎、勃ってやがる。

それを見たせいで、かえって腹が据わった。

峻介は足を開き、腰を落とした。

右の手のひらを上に向けて前へ差し出し、左手を膝に置く。

本家の盃事で、一度も崩したことのない構えだった。

着物を着ていれば、裾が股を隠す。

いまは何もない。

腰を落としたぶんだけ、ちんぽと金玉が板すれすれまで垂れて、
構えの真下でぶらりと揺れた。

「お控えなすって」

声は道場の梁まで通った。

「手前、生国は関東にござんす。姓は小針、名は——」

金玉の裏に、ぬるい布が当たった。

差し出した右手の真下に、慶臣が足袋の爪先を差し入れていた。足の甲で、金玉をすくい上げている。

「ッ、グ」

重さが足の甲に乗ったまま、ゆっくり持ち上げられた。

皮が引かれ、ちんぽの根元が前へ突き出される。

「口上が切れたな。頭からだ」

「本部長、その、おみ足が」

「私の足は落ち着いている。お前の膝のほうが笑っている」

峻介は奥歯を噛み、腰を落とし直した。

足の甲は、金玉の下から動かない。

「お控えなすって。手前、生国は関東にござんす」

慶臣の足が、軽く跳ねた。

金玉が足袋の上でぽんと浮き、腿の内側を打って戻る。

「ン、ツ……姓は小針、名は峻介」

足の甲が、今度は裏から押し上げてくる。

二つの玉が皮の中で寄り、ちんぽの根元が持ち上がった。

腿の筋が細かく震え、顎から汗がひとしずく、板に落ちた。

「稼業、縁持ちまして、片桐会の、若頭を、務めます」

足袋の指が、金玉の皮をつまむように丸まった。

「ッ、ふ……しがない、者に、ござんす」

ちんぽに、血が下りてくるのが分かった。

垂れていた物が、構えの真下で頭をもたげはじめる。

慶臣が声を出して笑った。

「口上で勃つのか、お前は。本家の盃事でも、そうやって切っていたのか」

「……以後、お見知りおきを」

差し出したままの右手の指が、震えて丸まりかけた。

峻介の顎から、汗が足袋の甲に落ちた。

慶臣は足を引き、濡れた甲を峻介の腿で拭った。

「あれを鳴らせ」

顎で示した先に、稽古始めを打つ大太鼓が台に据えてある。

「ばちは使うな。腰で叩け」

峻介は太鼓の前に立った。

張った皮が、ちょうど腰の高さにある。

半分まで起きたちんぽを、腰ごと前へ打ちつけた。

ペチ。

湿った、情けない音がした。

慶臣の笑い声が、道場の天井に跳ね返った。

「稽古始めがそれか。若い衆が全員寝坊する」

——鳴るわけねえだろ、こんなもんで。

「鳴るまで硬くしてから来い」

慶臣は峻介の後ろに回った。

着物越しに、硬い物が峻介の尻の割れ目に押しつけられる。

慶臣の両手が前へ回り、指が峻介の乳首をつまんで、ねじった。

「ア、ッ」

「声は低いくせに、乳首は素直に立つな」

耳の後ろで、慶臣の息が笑っている。

尻に当たる物の熱さと、乳首を潰す指の重さで、ちんぽが一気に張った。

「行け」

背中を押され、峻介は腰を振った。

ドン。

今度は鳴った。

亀頭がまともに皮を打ち、痺れるような痛みが根元まで走った。

「ズ、ツ、ウ」

「続けろ」

ドン。

ドン。

打ったびに、ちんぽが皮の上で跳ね返り、腹を叩いて戻る。

金玉が腿の間で振り子みたいに揺れる。

先から滲んだ我慢汁が、太鼓の皮に細い筋を引いた。

打ちつけた亀頭が赤く腫れ、皮に当たるとびに、ひりついた痛みが金玉の裏まで抜けていく。

腰を引くと、汗ばんだ尻が後ろの慶臣の着物に擦れた。

「いい音になってきた。寝坊した若い衆でも飛び起きる」
峻介の息が荒くなった。

痛いのに、萎えない。

それが一番、腹が立った。

「もういい。こっちへ来て座れ。私の足の間だ」

慶臣は座卓の縁に腰をかけた。

峻介はその前に膝をつき、正座した。

勃ったままのちんぽが、腿の間から上を向いて突き出ている。

隠す手は、腿の上に置かされた。

慶臣が、足袋の足を伸ばした。

足の裏が、正座の腿の間に下りてくる。

立ったちんぽを、土踏まずで腹へ押しつけた。

「ン、ッ」

「まだ硬いな。太鼓で懲りたかと思ったが」

足袋の裏が、竿を腹の上でゆっくり転がす。

亀頭が臍の下でつぶれ、皮が引かれて、また戻る。

布の目が裏筋をこすって、腰の奥が浮きそうになるのを、峻介は正座の踵で押さえ込んだ。

慶臣は踵に体重を乗せた。

ちんぽが腹に押し潰され、金玉が腿の間で逃げ場をなくす。

「グ、ウ、ツ」

「本家の盃で、お前はどこに座っていた」

「……末席の、手前です」

「今夜は、私の踵の下だ」

足袋の裏に、先から滲んだもので小さな染みができた。

慶臣はその染みを確かめもせず、足を引いた。

左手が、峻介の顎を下から掴んだ。

右手の指が二本、唇を割って入ってくる。

人差し指と中指が、舌の真ん中を押さえつけた。

「ン、ぐ」

歯が浮き、口が閉じられない。

指は太く、塩と墨の味がした。

「来月、本部の行が空いたままなら、お前は何を持ってくる」

「ふ、ふぁ……」

指が舌の付け根まで沈んだ。

えずきそうになって、峻介の喉が鳴る。

「聞こえん。若頭の声で言え」

「ひ、利息、を……か、からだで、おはらい、ひまふ」

慶臣の指が、舌の上で一度だけ大きく円を描いた。

「この舌の上に、来月の分を載せて来い」

口の端から涎があふれた。

顎を伝い、胸に落ち、そこから腹の筋をつたって、立ったままの

ちんぽの先まで垂れていく。

慶臣は指を抜かずに、それを見下ろしていた。

「涎まで、ちんぽに流れ着いたか。下品な口だ」
指がようやく抜かれた。

慶臣は濡れた指を、峻介の頬になすりつけて拭いた。

「来月、忘れていたら、この指で思い出させる」

慶臣は立ち上がり、壁際の防具棚へ歩いた。

誰かの稽古着の匂いが染みた棚から、小手を片方だけ取り出す。

紺の筒に、鹿革の掌。

慶臣はそれを右手にはめ、指を一度握って開いた。

「素手で触ってやるほど、お前はまだ払っていない」

慶臣は座卓の縁に戻った。

「膝で立て。手は頭の後ろだ」

峻介は膝立ちになり、指を後頭部で組んだ。

ちんぽの高さが、ちょうど慶臣の腿のあたりに来る。

小手の掌が、根元から握った。

ざらり、と革が擦れた。

人の汗を何年も吸った革は、乾いているのに、どこか湿っている。

指の付け根の詰め物が硬く、握られるたびに裏筋がごりごりと押された。

「ン、ンッ」

慶臣の左手が、峻介の短い髪を後ろから掴んだ。

顔を下に向けられない。

本部長の目の真下で、扱かれる。

革が、上まで滑った。

亀頭のくびれに革の縁が引っかけり、峻介の腰が引けた。

「フ、ツ、ぐ、ウ」

声は低い。

低く押さえたまま、喉の奥で潰れている。

小手の指が、今度は下へ回った。

金玉をまとめて包み、掌の上で転がす。

重さを確かめるように持ち上げ、離す。

「よく溜まっている。病院と帳場の往復では、手も空かんか」

峻介は奥歯を噛んだ。

鹿革がまた竿へ戻り、根元から先まで、さつきより速く扱き上げる。

革が我慢汁を吸って、くちゅ、と鳴りはじめた。

慶臣が、低く笑った。

「さつきの口上は、太鼓より鳴らなかったな」

峻介の喉が、大きく上下した。

「ふざけ、ッ、本家の盃事で、俺は口上を一度も噛んだことがねえんです、アゝ、親分衆が居並ぶ前で、片桐の若いものの仁義だけは聞いている気持ちがいいと、本家の代貸に言われたんです、ッ、ンゝッ、それを、あんたの足袋で三べんも切らされて、金玉を足で跳ね上げられて、アゝアゝ、そのうえちんぽで太鼓まで叩いて、ッ、笑えよ、笑うしかねえだろ、こんな若頭、アゝッ」

慶臣は笑わなかった。

小手の掌を開き、峻介の目の前にかざした。

鹿革の真ん中が、透明な汁で黒く光っている。

「代貸の褒めた口上より、こっちのほうがよく濡れている」

革の手が竿を握り直した。

今度は、緩めない。

硬い詰め物の段で、くびればかりを何度も擦られる。

「グ、ウ、オ、ッ、本部長、ッ、そこ、は」

「出すなら、顔を上げたまま出せ」

髪を掴む手に、力が入った。

顎が上がり、峻介の目に、慶臣の顔が真上から被さってくる。

白髪まじりの短髪。

笑っていない目。

「オ、オ、ア、ア、ア、イ、ッ、イク、ッ、本部長、ッ」

小手が、先をすっぽりと掌で覆った。

ビュッ。

ビュル、ビュ。

腰が跳ねるように前へ突き出され、革の掌の中に、熱いものが何度も叩きつけられた。

「アッ、アッ、グ、ウウ」

腿が痙攣し、組んだ指が後頭部でほどけかける。

慶臣は小手の中に先を握り込んだまま、最後の一滴まで絞るよう
に、手首をゆっくり返した。

ビュ。

押し出されたぶんが革の縁からこぼれ、板の間にぽたりと落ちた。

峻介の肩が、何度も大きく上下した。

「……仁義を切っていたときより、ずっと正直な面だ」
髪を掴んでいた手が離れる。

峻介の頭が、がくりと前に落ちた。

目の前に、小手の掌が差し出された。

鹿革の窪みに、白く濁ったザーメンが溜まっている。

「嗅げ」

峻介は顔を上げた。

「拭く前に、自分の出した物の匂いを嗅げ」

革の窪みが、鼻先まで寄せられた。

他人の汗が何年も染み込めた革と、自分の出したものの青くさい匂いが、胸の底まで入ってくる。

峻介は息を止めかけ、慶臣の目に見下ろされて、鼻から吸った。

「……誰の小手ですか、これは」

「知らん。明日の朝、稽古に来た誰かがはめる」

峻介の鼻の奥が、ひくりと引きつった。

「始末しろ。お前の禪でな」

這って、脱ぎ捨てた禪を拾った。

白い木綿で、鹿革の掌を拭う。

革の目に入り込んだぶんは、指で布を押し込んで搔き出した。

慶臣はそのあいだ、紺の筒をはめた手を差し出したまま動かさない。
い。

拭き終わると、慶臣は顎で板の間を指した。

「床もだ」

峻介は板の間に這いつくばり、落ちた白い粒を、禪の端で拭き取った。

四つ這いの尻が、灯のほうへ突き出る。

尻の割れ目が開いて、さっき慶臣の手に揉まれた跡が赤く残っているのが、自分でも分かった。

出し切ったちんぽが、腿の間で重たげに揺れた。

「太鼓もだ。皮に筋が残っている」

峻介は皮の前に膝立ちになり、自分の我慢汁が乾きかけた皮を、禪で擦った。

擦ると、皮がかすかに、とん、と鳴った。

慶臣が鼻で笑った。

慶臣は小手を外し、棚に戻した。

「禪は締めなくていい。袂に入れろ。領収書と一緒にな」

峻介は濡れて重くなった褌を丸め、病院の領収書の入った袂の奥へ押し込んだ。

襦袢を着て、長着を着て、帯を締め、羽織を肩にかけた。

着物の内側は素肌のままで、布が直に腿を撫でた。

何も締めていない金玉が、まだ熱いまま腿に貼りついている。

歩くたびに、袂の濡れた褌が脇腹に重く当たった。

慶臣は戸口で振り返った。

「数日のうちに、本部の料亭へ呼ぶ。上納の話の続きだ。口を空けて来い」

第2話　口移しの盃

三日後の夜、本部の料亭「ひさご」の奥座敷。

襖を開けると、仙波慶臣が床の間を背にして座っていた。

膳は脇へ寄せられ、塗りの箸と小鉢がひとつだけ下げ残っている。

座卓には白い磁器の徳利と、盃が二つ。

「遅い。仲居頭に裏から通させたはずだ」

「勝手口で、仲居頭に足を止められました。板場と、明日の鯛の値で揉めていました」

小針峻介は敷居の手前で膝をつき、頭を下げた。

廊下の先で、仲居頭の多恵の声はまだ板場に食ってかかっている。

「目の下三十センチで、あの値は通りませんよ。明日の宴会は本家の方が見えるんですから」

襖を閉めると、その声も遠くなった。

「座れ。そこではない、もっと寄れ」

峻介は進み出て、座卓の角を挟んで慶臣の斜め下に座った。

慶臣は峻介の帯のあたりに目を落とした。

「今夜は下に何を着けてきた」

「……新しい禪を、おろしてきました」

「道場の禪は、袂に入れたままか」

「捨てました」

「病院の領収書ごとか」

「領収書は、帳場に綴じました」

慶臣は短く笑い、徳利を持ち上げた。

自分の盃にだけ注ぎ、一口で干す。

懷から帳面を一冊出して、座卓に置いた。

片桐会の欄だけが開いてある。

三月続いた赤い線の横に、慶臣の手で、今日の日付と「口」の一字が書き込まれていた。

墨の色が、乾ききっていない。

「金で埋めたぶんは、この帳から線で消す。埋められんぶんは、こうして字で残る」

峻介の目が、その一字に吸いついた。

「来月は、下請けの入金が二本、戻ります」

「それで、この赤はどこまで消える」

峻介の頭に、事務所の金庫が浮かんだ。

十二人の給料袋を詰めたあとに残る札は、封筒の底を指一本ぶんも埋めない。

「……消えるところまで、消します」

「消えん所に、また利息がのる」

慶臣は空の器を指で回した。

「本部はな、片桐会の封筒が来なくても屋根は落ちん。私はな、払えん男が、払えんまま私の前に座っているのが見たい。それだけだ」

峻介は膝の上で拳を握った。

指の付け根の骨が、白く浮く。

——言いやがった。

——金じゃねえと、正面から言いやがった。

「十二人の給料は、本部の機嫌で左右される物じゃありません」

「若い衆の封筒には手をつけん。給料は、お前が今まで通り出せばいい。帳の赤のぶんは、お前の体で埋める」

「体で、とは」

「道場で、お前は口で言った。来月の利息を、体で払うと」

「指を突っ込まれて出た声を、約束とは言いません」

「声は声だ。私の耳には残っている」

慶臣は帳面を閉じ、座卓の端へ押しやった。

「組長の具合は、どうだ」

不意に聞かれて、峻介は閉じた帳面から目を上げた。

「……先週から、粥が喉を通るようになりました」

「そうか」

慶臣は、それ以上は聞かなかった。

窓の外で、板場の誰かが鍋を落とす音がした。

多恵の甲高い声が、それを追いかけていく。

峻介は、閉じた帳面の背を見ていた。

「口」の一字は、もう見えない。

見えないのに、墨の匂いだけが座卓の上に残っていた。

慶臣は二杯目を注ぎ、今度は干さずに口に含んだ。

器を置き、峻介の顎に指をかけて引き寄せる。

峻介は腰を崩して前へ傾いだ。

慶臣の唇が、峻介の唇をふさいだ。

冷えた酒が、他人の口の温度で舌の上へ流れ込んでくる。

辛みと、慶臣の煙草の残り香が、いっしょに喉へ落ちた。

飲み下すまで、唇は離れなかった。

「ッ……は」

離れた瞬間、峻介の口の端から一筋こぼれた。

慶臣は親指でそれを拭い、峻介の下唇に塗りつけた。

「酒は、ここまでだ。お前に盃は持たせん」

「……なら、俺の手は空きますね」

「空けておくものか。私に注げ。注ぐ前に、帯を解け」

峻介は帯に手をかけた。

結び目をほどき、長い帯を腰の脇に落とす。

着物の前が割れ、襦袢の白がのぞいた。

「それも開け。膝で立って、前をはだけたまま注げ」

峻介は襦袢の紐を抜いた。

厚い胸と腹が、行灯の明かりに出る。

新しい襦袢の前袋が、白く腰に食い込んでいた。

「襦袢の脇から出しておけ。注ぐときに、私に見えるようにな」

——どこまでやらせりや気が済むんだ、この男は。

峻介は前袋を横へずらした。

まだ柔らかいちんぽが、布の脇からこぼれて垂れる。

腰を上げ、徳利を両手で持った。

本家の盃事で、何度も上の者に注いできた手つきが、指に残っている。

慶臣の盃に、口を寄せた。

「目だ」

峻介の目は、注ぎ口の先にあった。

「注ぐあいだ、私の目から外すな。外したら、一步下がって、やり直した」

峻介は注ぎ口から目を引き剥がした。

慶臣の目が、真正面にある。

笑ってもいないし、怒ってもいない目だった。

徳利を傾けた。

とく、とく、と酒が鳴る。

見ていないので、どこまで入ったか分からない。

溢れた酒が、慶臣の指を濡らした。

峻介の目が、思わずそこへ落ちた。

「下がれ」

峻介は一步、下がった。

はだけた着物の裾が畳を擦り、垂れたちんぽが腿の間で揺れる。

慶臣は濡れた指を振って、雫を峻介の腿に飛ばした。

「寄れ。もう一度だ」

峻介はにじり寄り、徳利を構え直した。

慶臣の目を見る。

見られている。

見られているのは目だけではないと、腿の間で分かった。

ちんぽが、少しずつ重さを変えていく。

とく、とく。

酒の音と、自分の鼓動が重なる。

注ぎ終わる頃には、禪の脇から出た物が半分まで起きて、徳利の腹に当たった。

こつん、と磁器が鳴った。

慶臣が声を出して笑った。

「いい合いの手だ」

慶臣は満ちた酒を一息に干し、空の器を突き出した。

峻介はまた傾けた。

こつん。

干される。

突き出される。

三杯目を注ぐころには、ちんぽは白い腹に押しつけられるほど張っていた。

こつん。

こつん。

傾けるたびに、先が磁器を叩く。

冷たい肌に、先から滲んだ汁がぬるく伸びた。

それでも峻介は、目を外さなかった。

「注がされるのが嫌だと、顔じゅうに出ている」

「……手首が、重いだけです」

「手首で磁器は鳴らん。鳴らしているのは、その先だ」

峻介は奥歯を噛んで、空になった磁器を座卓に戻した。

慶臣は胡座に座り直し、着物の裾をはだけた。

下帯を横へずらすと、太いちんぽが半ば起きて、腿の上に重く倒れた。

竿が長く、亀頭が張って、皮はとうに剥けている。

根元の毛に、白いものがいくらか混じっていた。

「利息だ。口で払え」

峻介は慶臣の腿の間へ這い入った。

はだけた着物が肩から落ちかけ、背中の筋彫りの龍が半分出る。

慶臣のちんぽから、男の汗の匂いが立ちのぼってきた。

「手は畳だ。口だけでやれ」

峻介は両手を畳についた。

四つ這いに近い形で首を伸ばし、亀頭に唇を当てる。

しょっぱい。

舌を出して、張った先をひと舐めした。

慶臣のちんぽが、峻介の舌の上で重さを増した。

口を開け、亀頭を含む。

顎が外れそうなほど太かった。

「ン、ぶ」

唇の裏で歯を隠し、首を沈めていく。

竿の半分で、喉の手前に当たった。

「酌は、徳利の口が盃の縁に届いてからだ。半分で止めるな」

「ツ、ぶ……ふ、太、すぎ」

「盃事の作法も知らんのか、片桐は」

慶臣の手が、峻介の後頭部に乗った。

押しはしない。

ただ、退がる向きを塞ぐ重さだった。

峻介は鼻で息を吸い、首を前後に振りはじめた。

ジュ、ポ。

ジュプ、ジュポ。

唾が竿を伝い、慶臣の金玉の上に溜まっていく。

首を引くと、亀頭のえらが唇の裏に引っかかって、ちゅぽ、と鳴る。

沈めると、竿の太い血の筋が舌の上で脈を打つ。

顎の付け根が、もう痛い。

畳についた両手の拳骨に、自分の汗が落ちた。

「目だ。さっきの酌と同じだ」

峻介は啜えたまま、目だけを上げた。

慶臣の顎と、白髪まじりの短髪が、真上にある。

目を合わせたまま、舌を平らに広げ、竿の裏に押し当てて首を振った。

慶臣の息が、上で一度だけ長くなった。

「それでいい。注ぎ口を、器の縁に添わせる手つきだ」

慶臣の指が、峻介の短い髪をゆっくり梳いた。

褒められた所で、峻介の喉がひくりと締まる。

締まった喉の奥へ、亀頭がさらに一寸押し込まれた。

「ン、ォ、ツ、ゴ」

鼻水と涎が一緒に垂れ、慶臣の下帯を濡らした。

峻介は首を引き、息を吸い、また沈めた。

引くたびに、竿にまとわりついた唾が泡になって唇の端からこぼれる。

沈めるたびに、喉の入口がえらに擦られて、目の縁が熱くなる。

慶臣の右手が、小鉢の脇から塗りの箸を取った。

「胸を上げろ」

峻介は咥えたまま、四つ這いの胸を少し浮かせた。

箸の先が、垂れた胸の乳首をつまんだ。

「ンンッ」

煮物の小芋でもつまむように、慶臣は乳首を持ち上げ、ひねり、離した。

厚い胸の肉が、つままれたほうへ引かれて揺れる。

「大きい胸だ。小芋より重い」

反対の乳首も、つままれた。

引かれる。

離される。

引かれるたびに、喉の奥でちんぽが跳ね、峻介の首の動きが乱れる。

「顎が休んでいるぞ」

峻介はえづきを飲み込んで、首を振り直した。

ジュポ、ジュポ、ジュポ。

自分の口が立てる音が、座敷じゅうに響いている。
襖の外で、畳を摺る足音が止まった。

「失礼いたします。お銚子を、お持ちいたしました」
多恵だった。

峻介の背中が硬くなった。

口の中のちんぽが、慶臣の腹のほうへ跳ね上がる。
後頭部の手が、峻介を根元まで押し込んだ。

「ン、ゴ、ッ」

喉の入口に、亀頭がはまった。

息ができない。

鼻が慶臣の陰毛に埋まり、汗の匂いしか吸えない。

「そこへ置いて行け。今夜はもう呼ばん」

慶臣の声は、さっきまでと少しも変わらなかった。

「かしこまりました。……あの、本部長さん」

「何だ」

「明日の鯛、板場が目の下三十を譲らないんですよ。本家の方の席ですし、本部長さんから一言」

慶臣の手が、峻介の頭を、ゆっくり前後に動かしはじめた。

喉の奥を、亀頭が出入りする。

ゴプ。

「グ、プ、ッ」

峻介の声が、喉の中で潰れた。

「板場には、三十で出せと言っておけ。払いは私が持つ」

「まあ、助かります。それじゃ、お休みなさいまし」

足音が遠ざかった。

慶臣の手が、峻介の頭を引き上げた。

ちんぽが喉から抜け、涎が糸を引いて顎から垂れた。

「ゲホ、ッ、ゴホ、ッ、オ、エ」

峻介は畳に両手をつき、えずいた。

涎と、慶臣の先走りが混じったものが、畳に糸を引いて落ちる。

喉の奥が、亀頭の形に開いたままだ。

「今ので、喉がよく締まった。多恵に礼を言わんとな」

「ッ、多恵さんに、ゲホ、ッ、聞こえていたら、どうなさるおつもりで」

「あれの耳は、板場のほうにしか向いておらん」

峻介は咳き込みながら、慶臣の腿に額を押しつけた。

腿の間で、峻介自身のちんぽは、萎えるどころか禪の脇で反り返っていた。

慶臣は上体を前へ倒し、峻介の背に覆いかぶさるようにして腕を伸ばした。

箸の先が、峻介の股ぐらまで届く。
亀頭のくびれを、箸の先で挟んだ。

「アゝッ」

「仲居の声で、こうなったか」

挟んだまま、皮を引き上げる。

戻す。

引き上げる。

「本部長、ッ、それは、ッ」

「口が空いているぞ」

峻介は慶臣のちんぽに、もう一度食らいついた。

今度は自分から喉まで沈めた。

「ン、ン、グ、ツ、ン」

箸が、峻介のくびれを挟んだまま離れない。

啜えて首を振るたびに、自分のちんぽが塗りの先で引かれて、揺れる。

引かれるたび、先から汁が細い木を伝い、塗りの上で光った。

慶臣は挟むのをやめ、箸の先を一本だけ立てて、亀頭の割れ目をつついた。

「ンッ、ンン、ンッ」

咥えたまま、峻介の腰がびくびくと前後した。

四つ這いの尻が持ち上がり、また落ちる。

金玉が腿の間で縮み上がり、竿の裏が塗りの先の下でひくついた。

「小芋のほうが、まだ箸に素直だ。皿から逃げる」

慶臣はその先を割れ目に当てたまま、もう片方の手で峻介の後頭部を引き寄せた。

喉の奥まで、また入る。

ゴプ、ゴポ。

鼻の奥に、自分の涎の匂いが逆流してくる。

峻介は、慶臣の腿に額を擦りつけるようにして首を振り続けた。

慶臣の腿の筋が、峻介の頬の下で張りはじめた。

「出すぞ。吐くな。口の中で受けて、そのまま持っている」

峻介は唇を締めた。

慶臣の手が、峻介の頭を根元に押しつけた。

ちんぽが口の中で脈打った。

ビュッ。

ビュル、ビュ、ビュ。

熱いものが舌の上と喉の手前に、何度も叩きつけられる。

「ンッ、ンッ」

喉が飲み下しかけ、峻介はそれを舌の付け根で押し止めた。

青くさい。

苦い。

口の中が、慶臣のザーメンで一杯になっていく。

慶臣はゆっくり腰を引いた。

亀頭が唇を抜けると、白いものが一筋、下唇を越えかけた。

峻介は唇をすぼめてそれを吸い戻した。

「口を開けろ。見せろ」

峻介は体を起こし、上を向いて口を開けた。

舌の上に、白い溜まりが揺れている。

慶臣はそれを覗き込み、満足そうに鼻を鳴らした。

「閉じろ。まだ飲むな」

峻介は口を閉じた。

頬の内側に、ザーメンのぬめりが貼りつく。

慶臣は箸を小鉢に戻し、多恵が置いていった銚子を引き寄せた。

手酌で、自分の器に注ぐ。

「私が一杯飲むあいだ、口に入れたままでもいい。そのあいだに、言いたいことがあるなら言え」

——口に入れたまま、何を言えってんだ。

峻介は慶臣を睨んだ。

慶臣は酒を口元まで上げ、飲まずに止めている。

峻介の口の中で、ザーメンが唾と混じって増えていく。

峻介は顎を引き、口を閉じたまま喉で嚥った。

「ん、ふ……ほんぶちよう、らいげつ、ほんたいの、はんぶんは、かねで、いれまふ、ツ、そのかわり、のこりは、こうして、くちで、はらいまふ、ン、だから、はもんのはなしは、かみに、ひないで、くらはい、ツ、かみにさえ、ひなければ、わかいしゅうは、なにも、しらずに、すみまふ、ツ、はんぶんで、てを、うってくらい、ン、ほんぶちよう」

言うたびに、口の端から白いものが漏れかけ、峻介はそのつど吸い戻した。

慶臣の手の酒は、傾いていなかった。

峻介の頬が、ザーメンを含んだまま膨らんでいる。

睨み返した目の縁が、えずいたあとの涙で赤い。

慶臣は、その顔をしばらく眺めていた。

「本家の盃事で、お前が話をまとめるのを一度見た。相手の組長が、最後には自分から頭を下げていた」

峻介の目が、わずかに揺れた。

「あの口が、今は私のザーメンで膨らんでいる」

慶臣は、ようやく酒を一息に干した。

「半分の話は、金を持ってきてから聞く。手のひらに出せ」

峻介は両手を口の下に揃え、唇を開いた。

どろりと、白い塊が手のひらに落ちた。

唾と混じって泡立ち、指の間から垂れかける。

「それで扱け。自分のちんぽを」

峻介は手のひらを見下ろした。

本部長の出したザーメンが、自分の手の窪みで光っている。

「本部長の、物で、ですか」

「お前の口で温めてある。ちよūdいい」

峻介は膝立ちのまま、ぬめった手で、禪の脇から突き出た自分のちんぽを握った。

ぬるり、と根元まで滑った。

他人の体温が、竿に塗り込められる。

「アゝッ」

「私の目を見て扱け。酌と同じだ」

峻介は顎を上げた。

慶臣の目を見ながら、手を動かす。

ヌチュ、ヌチュ。

自分の手が立てる音が、銚子の触れ合う音より大きい。

慶臣の匂いと自分の汁が混じって、手の中で糸を引く。

「オ、オ、ア、ツ、ツ」

膝立ちの腿が震え、はだけた着物が肩から滑り落ちた。背中の龍が、行灯の明かりにすっかり出る。

「速いな。割れ目をつつかれたのが、そんなに効いたか」

「ツ、うるせ、ツ、ア、ア、ア、ア、ツ」

「出すなら、そこだ」

慶臣は顎で、自分の足もとの畳を指した。

「私の足袋の先に出せ。かけたら承知せん」

峻介はにじり寄り、慶臣の足袋のすぐ先の畳に、竿の先を向けて握り込んだ。

白い足袋の爪先が、目の前にある。

「イ、ツ、アッ、グ、ウ、ツ」

ビュツ。

ビュ、ビュル。

白いものが畳の目に飛び、足袋の爪先から一寸も離れない所に散った。

一滴が、足袋の縁をかすめた。

慶臣のザーメンと自分のものが混じった、濁った溜まりが畳に光る。

峻介は畳に片手をついて、肩で息をした。

腿の内側が、細かく跳ねている。

出し切ったちんぽが、禪の脇で重たげに垂れ、先から最後の一滴が畳に糸を引いた。

口の中には、慶臣の味が残っていた。

舌の付け根に、喉の奥に、歯の裏に。

唾を飲むたびに、それが少しずつ腹へ落ちていく。

「縁にかかった」

慶臣が、足袋の爪先を峻介の顔の前へ差し出した。

白い布に、小さな染みが一つ。

「どうするかは、もう分かっているだろう」

峻介は四つ這いになり、慶臣の足袋に顔を寄せた。

舌を出して、布の染みを舐め取った。

木綿のざらつきに、自分の味がする。

「畳もだ。襦袢の袖で拭け。帳場に綴じる物ではない」

峻介は襦袢の袖を引き寄せ、畳に散った白い溜まりを拭いた。

畳の目に入り込んだぶんは、袖の端を押し込んで擦り出した。

「手が汚れているぞ」

指の股に、白いものが絡みついている。

「拭く物は、ありますか」

「舌で足りる」

峻介は自分の指を見つめ、それから一本ずつ口に入れた。

慶臣の味と、自分の味が、舌の上で区別がつかない。

指を全部しゃぶり終えるまで、慶臣は手酌の酒を手にしたまま見ていた。

「着物を直せ」

慶臣は立ち上がり、襖に手をかけた。

「来月の納期は、屋敷の寢所だ。金を揃えられたら揃えて来い。揃わなければ、禪一枚で来い」

襖が閉まった。

峻介は帯を拾い、ふらつく足で結び直した。

濡れた襦袢の袖が、長着の中で腕に貼りつく。

廊下の向こうから、多恵の声が近づいてきた。

「若頭さん、もうお帰りですか。あら、お袖。お酒でもこぼされませんでした？ 染みになりますよ、すぐ水につけないと」

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01054794.html

奥付

作品名 若頭、上納金の利息に本部長のモノを啜えさせられ、納期のたびに中出しで払わされる

サークル タビュールへ

発行日 2026・10・12

レーティング R18